

戦後五十周年記念事業として、市の助成を頂き、市長の参加を求め、フィリピンのコレヒドール島、ルソン島南部にあるパグサンハン（比島寺）やカリラヤなどで慰霊祭を行っておられる（弟がカンルバンで戦病死）。

また、全抑協関係においても、県連の要請を受け昭和六十三年二月一日に設立総会を開き、以後支部長として高齢化（年に二、三人は死亡）する会員の相談相手として活躍しておられる。

（滋賀県 松吉 勝司）

シベリア抑留

北海道 北村 忠一

一、出生から入隊（大正十三年）

北海道の玄関口と言われた港町、そして今、観光都市と発展した函館市の郊外にて母親の手で育てられました。二男五女の末っ子として大正十三年一月九日、

行商をしていた家で出生しました。

昭和五年小学校に入學。六年生のころは一クラス四十人の男女別で、成績はまあまあでしたが、今で言う母子家庭でしたので中学校等は受験できず、当時の実業学校を選ぶしかなく、高等科を卒業して函館工業学校に入學することとなり、何となく「建築」を選ぶこととなりました。このことが軍隊で「工兵」となることが決まっていたようなものでした。

二、ソ連軍侵攻前（昭和十六年）

「建築」を専攻した私は昭和十六年三月春、勇躍して渡満、鞍山市にある旧満州に誇る昭和製鋼所の工務部建築課に技術者として入隊まで三年八カ月、鉄鋼生産の戦士として若い情熱を傾けていた。

昭和十九年十一月、営口市にあった満州第四七四部隊に初年兵として入隊しました。当部隊の装備は、兵器、被服、食糧など当時は割合に物が揃っていました。二十年に入って少しずつ食糧が不足になったようでした。部隊からは五名が甲種幹部候補生として選ばれ、チチハルの教育隊に入校することになりました。

三、ソ連侵攻（昭和二十年）

関東軍工兵幹部教育隊、チチハル、滿州第二八九部隊、私どもは幻の三期生として昭和二十年七月一日に入校、二区隊編制にて、ソ連軍の参戦をチチハル近郊の富拉爾基^{ふらるき}で架橋演習中に知り、いち早く部隊に帰り、教育隊は南下して再度教育を受けるとの情報で、貨車にてハルビン駅に到着。一時滿軍の反乱を受けて出動、初めての戦鬪で無我夢中に郊外の畑の中を進撃しました。戦火を交えることなく駅構内に戻ったが、疲労困憊で、食るように白日の下プラットホームのコンクリート床を枕に、完全武装の格好で眠り込んだのが昨日のように思い出されます。（八月十四日）

四、終戦（昭和二十年）

駅構内の列車の周辺で慌ただしい人の動きに終戦を告げる者があり、流言飛話でデマだと叫び、犯人をたたき斬ってやれなどの怒号がプラットホームに飛び、混乱の極みを展開していました。（八月十五日）

我々は香坊^{かうぼう}にあった鉄道連隊の空兵舎に引き揚げたが、その後直ちに命令を受けた候補生六名がハルビン

駅構内の貨物倉庫の警備に当たり、そこで数日間勤務することになりました。武装は、銃と手榴弾を持ち警備に就きました。

貨物倉庫には民間人の日本に送る品々が山積み置かれており、夜になると満人と覚しき者が周辺で激しく発砲を繰り返していました。また、友好的な満人が酒を持って訪れ、我々は倉庫にあった被服などと物々交換をして、酒を飲んで警備に当たったものでした。幾日もたたないうちに彼らが武装解除を求めて我々に銃口を差し向け対峙し、押し問答を重ねましたが、敗戦国の兵隊はやはり相手国に従わざるを得なかったことを覚えています。なお、この警備勤務中に部隊と全く連絡がとれず、また私どもを迎えに来る様子もなく、意を決した我々は倉庫の荷物を勝手に解きほいて、民間人らしい服装にと着替え用の衣服を調達、背囊いっぱい詰めて、一般市民の生活に紛れ込み、軍隊より脱走を計画しましたが、倉庫を出て数分後に、幸か不幸か本隊の連絡トラックに出くわし、部隊に救援された格好で合流しました。

五、シベリア抑留地への旅（昭和二十年秋）

ハルビン、牡丹江省横道河子海林收容所、牡丹江收容所、仮寝住まいをしながら綏芬河^{すいふんが}を経て入ソ、この間、有蓋貨車の二段ベッドに積み込まれ、コムソモリスク市の西北ホルモリン地区第三收容所（二一七分所）に二十年十二月に到着、抑留生活が始まりました。

六、抑留地の生活（昭和二十年冬より）

收容所での作業は、伐採、木材運搬、木材の貨車積み降ろし、建築などで、私は收容所の生活が必要とする水、燃料の調達のため、氷割り、風倒木の薪拾いなど行い、氷の運搬には六尺四方の天幕一枚にかけらの氷の塊を肩に担いで数キロの道のりを午前中二回、午後には風倒木（長さ二〜三メートル、木口四〜五センチ程度のもの）一本ずつ担いで二回、体力を消耗しないよう気を遣いながら運搬作業に従事しました。

宿舎は古ぼけた丸太小屋での暗い生活で、シラミが肌着の縫い目に一列に並んでいるのを幾度か見て驚いたものでした。食糧の分配も飯盒の蓋で一杯の薄粥、

それにわずかな黒パンのかけら、このように食糧が不足だったため、糧秣倉庫の作業では穀物（主に大豆）、魚類（鮭、ニシンの塩漬）、肉などを盗んでは、仲間とラーゲルでの食事を補給したことが数多くありました。我々の入った收容所は、第二次大戦中にドイツの捕虜が入っていたところとも聞きました。この收容所は下士官主体の一千人の大隊でした。

七、労役（昭和二十二年ころより）

入所当時の労働は、收容所での我々の生活を維持するために食事用の水と燃料、それに暖をとるのに燃料としての薪の運搬、宿舎用の天幕の設営などの建築でしたが、その後は伐採、暖かくなつてたからは丸太の組み積みによるクラブの建築など行つたが、割合元気であつたせいとか、二人で丸太を担ぎ、足場を駆け足で上つて運んだこともありました。

労働で特に辛く暗い思い出は、寒中の夜、收容所付近で四名が凍てついた土の穴の中に薪を燃やして、一晩じゅう壁塗り用の土を凍りつかないように徹夜作業を行つたときの身に凍みた寒さと、時がとまつたよう

な静寂、星空を見ながら朝の交代者が来るまでの長かったこと。一体俺はなんでこんなことをしなければならぬのか、故郷の肉親、友達、それに風景、食物など頭の中に次々と浮かんでは消えていったことが今更のように思い出されます。

伐採、建築のノルマは、比較的健康に恵まれていたせいか、概ねソ連の基準のものをこなしたように思いました。

入ソ二年目ころより、民主運動の指導を受け収容所の青年部のトップになり、やがて委員長となり、地区の講習会に三度派遣されましたが、だれが指名したかわからないことの一つです。委員長の職は収容所の専従となっていて、報酬を受け取っていません。

なお、二一七収容所元大隊長柿田初市氏（故人）が思い出の中で、

「収容されて時間がたつて民主運動が始まり、初めは友の会が生まれ、やがて反ファシスト委員会が結成され、民主運動が盛んになったが、元軍人の階級章も自発的にはずされ、意識の改革もなされて、日本人に

よる日本人の制裁はなかった。ソ連側も初めのころ、日本の軍隊組織を上手に利用しながら、片方で民主運動をさせたようだ」と書かれております。

八、抑留者の統制管理

労役につくには作業種別、基準、扱い方など、多分カントラで決めていたものと思われます。健康管理は特にどのようであつたかわかりませんが、入ソ三、四年目あたりになると、労働時間、休日、ラゲル内での入浴、理髪などが決められ、健康診断と称して主に女医の「尻つまみ」による肉の盛り上がりなどによって等級がつけられ、重、中、軽の作業に分類されたと思われまふ。私も三度目に派遣されたハバロフスク地区の幹部講習中に、約百名前後の中から伐採作業要員の編制に当たり、女医による診断にて残留部隊となり、責任者にされました。

この作業隊はおよそ数週間程度であつたと思います。が、屈強な彼らも相当痩せて気力も損なわれて帰ってきました。

厳寒の冬期用の着衣は、まず足下には靴下ではなく

タオルのような布を足にぐるぐる巻きにして、フェルト製のカートンキを履き、綿入れ綿製のズボン、その上に同製の上衣と大型手袋、防寒帽を被り、特に手、足、顔、鼻の凍傷を防ぎましたが、これらの病にかかった者が入ソ当時、多数出ていました。

我々民主委員会の者の仕事は、専従になってからは、ラーゲルの同僚が屋外の作業に出た後は、レーニン・マルクス主義、それに資本主義の冊子によって勉強を行い、夜、作業から帰ってきた同僚にラーゲルごとに、夕食後を見計らって十分間程度の講義に赴き、また休日には演劇団による講演などを行っていました。

民主委員会の組織については、委員長を頭に宣伝部、文化部、青年部などに分かれ、青年行動隊もあり、演劇文化として「革命座」がありました。民主化教育にはソ連側の指導があり、日本新聞などがハバロフスクで刊行され、収容所に配布され、日常の宣伝活動に使われました。

九、抑留中の生活と極限状態における意識
飢えと寒さと重労働の体験は入所当時特に感じてい

ましたが、タポール（おの）を担ぎ、ピラー（のこぎり）を持って出掛けた伐採作業の行き帰りはだれもが口数が少なく、頭を深く垂れた集団がとぼと歩くさまは、全く前途に光がなく、ただただ故郷で食べたぼたもちが脳裏に強く押しかぶさり、来る日も来る日も続いた山の中の雪道はどうしようもないものでしたが、これを支えていたものは、きつといつかは日本に帰れるんだ、春を待てば何かあるのではと、わずかな願いではなかったでしょうか。春が過ぎ夏が来て、四季の息づかいは生物に感じられました。

そのころ、日本へ手紙を出すことが許され、わずかながら明るさを取り戻すことができました（私の手紙は家に着いていませんでした）。

十、帰還（昭和二十四年）

入ソ二年目あたりより民主運動に参加して、ハバロフスク地区講習会の講師として、同地区にて六名の講師団が決められたラーゲルに赴き、講義などで暮らしているうちにダモイの情報を受けました。我々講師団はそれぞれの小隊の車両責任者として貨車に乗り込み、

民主活動を行いながら南下してナホトカに到着しました。現地には各地区よりダモイのためにたくさん日本人抑留者が帰国船待ちの状態にて待機中で、収容所内外では使役が盛んに行われておりました。

我々は十一月一日、舞鶴入港の引揚船信濃丸にてナホトカを離れたわけですが、当時四年ぶりに見た日本人看護婦さんの白衣姿が目には焼き付いて離れませんでした。

出港後数時間は、現地で乗船できなかった同胞とのやり取りに「スターリン万歳」の声がナホトカの港、ソ連の山々が見えなくなるまで狂気のように呼び合った様子がまざまざと甦ります。

船内は波浪のために大きく揺れ続き、船酔いで苦しい航海でした。

十一、帰国後の生活（昭和二十四以降）

軍隊、抑留での社会への空白、そして復員者としての出遅れはありましたが、故郷北海道は比較的温かく見守ってくれていました。母の墓参を済ませ、建築の技術を買われ市役所に就職、爾来三十有余年、定年ま

で地方行政の末端で地域の振興に微力ながら働いてまいりました。

戦後五十年を経た今日、シベリアの抑留は何であつたか、多くの人々はそれぞれの答を持って生きていると思います。また、悲しくも異国の土に消えた戦友、帰国後に亡くなられた「シベリア帰り」、さまざまに数奇な運命をたどった仲間たち、帰国後の紆余曲折の中にあつて生きてきた幸せとそのシベリアの抑留四年間の人生観は、何物にも負けてたまるかと、これらの生きがいを守り通したいものです。

帰国後長い間、時々夢に出てきた事柄がありました。それは、ナホトカまでたどり着いて、何かの理由で奥地のシベリアまで再び送り還される光景が出てきて、ハツとして目を覚ましたことがたびたびありましたが、今はこの恐ろしい夢を見ることがなくなりました。これも五十年という歳月が解決してくれたのではないのでしょうか。